様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ９ 日現在

機関番号：１６２０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５３１２５０

研究課題名（和文）発達障害幼児の学びの機会を埋め込むためのアプローチの開発と効果の検証

研究課題名（英文）development and examination of the approach for children with developmental disorder based on naturalistic approaches.

研究代表者
松井　剛太（MATSUI, GOTA）

香川大学・教育学部・准教授

研究者番号：５０４３２７０３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、自然主義的アプローチに基づき、発達障害幼児に対する保育所・幼稚園・認定こども園における保育アプローチの開発と検証であった。就学前施設における個別の指導計画の様式と記述内容を分析することによって、遊び中心の保育に適した様式を開発した。また、個別の目標に準じた学びの機会の埋め込みに際して、保育の中にすでに埋め込まれている支援を再発見する過程を経ることで子どもの学びにつなげるアプローチを提唱した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was development and examination of the approach for children with developmental disorder in the nursery schools, kindergartens, centers for early childhood education and care based on naturalistic approaches. The new format of individualized education plans which suitable for early childhood education and care was developed. The results suggest that it is important to process of discussing among teachers to find the already embedded supports when teacher think learning opportunities for children.

研究分野：保育学

キーワード：保育　障害　学びの機会　自然主義的アプローチ　個別の指導計画

１．研究開始当初の背景

（１）近年，多くの臨床研究の結果から，発達障害は多様な要因によるエピジェネティックな変化が引き金となることが知られてきた。杉山（2011）によると，まず人の遺伝的素因として認知の発達凸凹（でこぼこ）があり，それに加えて，生活していく中での環境不適応が加わることによって発達障害が生じるとされる。

（２）本研究では，「幼児の生活世界である家庭や保育所・幼稚園などの自然な環境において自然な生活の文脈の中に学習の機会を埋め込むこと」（水内，2003）を前提とした自然主義的アプローチに立脚した。自然主義的アプローチは米国で先進的に行われており，乳幼児期に関しては Activity-Based Approach が広く知られている。このアプローチでは，障害のある子どもを完全に自由な環境におくわけでもなく，学習を強調した訓練的な環境におくわけでもない，中間の環境を考える。保育者は，子どもの主体的な活動の中に学びの芽を見出し，学びの機会をその活動に根ざした形で埋め込むことが求められる（Pretti-Frontczak,Bricker,2004）。

（３）日本では，就学前から学童期以降に支援をつなげるべく，個別の指導計画が作成され障害幼児への指導が行われている。つまり，個別の指導計画には，保育者が見出した学びの機会が埋め込まれていると考えることができる。しかし，個別の指導計画の作成自体が行われていない保育所・幼稚園もあり，作成していたとしても「使える」個別の指導計画になっていないところも多い。また，人的環境や家庭環境についての記述は不十分であるのが現状である。

２．研究の目的

（１）発達障害幼児の指導における学びの機会の埋め込みの実態と課題を明らかにする。

（２）発達障害幼児に対する保育者の指導内容と適応障害との関連性を明らかにする。

（３）アプローチの効果を上げるための家庭との連携，保育カンファレンス・個別の指導計画の開発を行う。

３．研究の方法

（１）Activity-Based Approach の開発者である Diane Bricker 博士を日本に招聘し，保育所・幼稚園の保育者を中心に広く教育関係者，研究者を対象とした講演会を実施する。米国の Activity-Based Approach の現状と課題について研究成果を基に講演してもらい，研究の基礎となるアプローチの理解を深める。

（２）保育所・幼稚園で発達障害幼児を対象に作成されている個別の指導計画の様式と記述内容を分析し，学びの機会がどのように埋め込まれているか，その特徴と課題を検討し，アプローチの開発を行う。

（３）保育所・幼稚園でのアクションリサーチにより開発したアプローチを中長期的に実施する。アプローチの導入による保育者の指導の変化や子どもの発達や環境適応について，効果を分析する。

４．研究成果

（１）保育所・幼稚園で使用されている個別の指導計画に関して，北海道，宮城県，兵庫県，岡山県，香川県，福岡県の様式を対象に，個別の指導計画の様式が現状の保育所・幼稚園の実践に適しているか，活用しやすいものになっているかどうか分析した。

その結果，各県・各園によって使用されている様式や記入される項目内容が異なること，また，様式の多くが特別支援教育の領域で使用されているものに準じているため，保育の中心的活動である遊びの記入について，特に活用されにくいものになっていることを明らかにした。

具体的には，小学校，中学校，特別支援学校で使用されている個別の指導計画の多くは，複数の発達領域にわけて，可能な限り客観的で評価可能な目標設定のもとで作成されており，保育でもそのような領域分化された様式を参考にしていることが多かった。例えば，幼稚園の 5 領域および発達領域に分けて，子どもの実態，ねらい，手立てについて，領域ごとに記入する様式がよく見られた。しかし，保育における遊びは，さまざまな発達領域の機能連関によって，子どもの全体的な発達を促すため，既存の個別の指導計画の様式はなじみにくいことがわかった。

本研究で開発するものの方向性として，既存の個別の指導計画の利点を生かしつつ，保育の遊びも表現できるような保育独自の個別の指導計画を考える必要性を見出した。遊びに関しては保育的に長期の「ゆったり」とした計画を重視し，身辺処理など個別の能力との関連が強く，結果が明示しやすい発達領域は，特別支援の知見から「きっちり」した計画を立てるような様式の開発をすることにつながった。

（２）Activity-Based Approach の開発者である Diane Bricker 博士を日本に招聘し，講演会を開いた。2013 年 8 月 31 日の日本特殊教育学会の教育講演として，特別支援教育を専門とする研究者および教員，さらに保育関係の研究者と保育者等，200 名以上が参加する会となった。

米国の早期介入の領域における研究動向を踏まえ，Activity-Based Approach の基礎的な理論背景や方法論の概要をテーマとした。講演では，自然主義的アプローチ（naturalistic approach）ではなく，真正のアプローチ

（authentic approach）のほうが Activity-Based Approach の本質に合致しており，「あたりまえ」の保育の実践により，本来あるべき子どもの生活に即したアプローチの活用が必要であることが語られた。

特にポイントとなるのが, Linked System であった。これは，スクリーニング，アセスメント，目標の設定，介入，評価を関連付けるもので，アプローチの基本的な枠組みとして不可欠なものであった。

（３）（１）（２）の研究成果を基盤にして，発達障害幼児に対する保育所・幼稚園の保育アプローチを開発し，幼稚園１ヶ所，保育所２ヶ所で試行・検討した。

まず，Linked System に則り，スクリーニング，アセスメントにおいて，生態学的観点に基づいたヒトマップ，モノマップを開発した。これは，対象児にかかわりのあるヒト，モノを園内の保育者の協議のもとでマップ化するものである。

目標の設定，評価においては，個別の指導計画の様式として，身辺処理の項目については，教え込み型目標設定の記入欄，遊びの項目については，しみこみ型目標設定の記入欄を設けて，作成するようにして，保育カンファレンスをベースにした取り組みを行った。

さらに，家庭環境を含めるうえでポートフォリオの共同作成をすることで，家庭環境の把握と調整を図り，対象児の生活を基盤としたアプローチの枠組みを構築した。

試行した結果，保育者が「参加」の概念をどう捉えているかが重要であることがわかった。保育者が障害児に関して，対象児の学びの機微にかかわらず，「参加できる子／参加できない子」という見方になりやすいとアプローチが機能しない。

そこで，あたりまえの保育がすべての子どもの学びに通じていることを確認するために，保育の中で時間をかけて子ども理解を積み重ね，実践を試行錯誤するうちに，保育者と子どもたちの息が合ってくること，そこには，特別支援教育ではない保育の知恵から埋め込まれている支援が寄与することを明らかにした。まだ，障害児保育において支配的なまなざしになりやすい二項対立を用いて事例検討し，脱構築実践のための気づきを得ることも提起した。「参加／不参加」，「一般／個別」，「育児／保育」，「保育／療育」などのような枠組みを用いて検討を深めることで，二項対立の支配的なまなざしに縛られていた実践を脱構築するための気づきを得ることができると考えられる。

こういった観点も含めたアプローチの改善が求められる。

５．主な発表論文等
（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① 松井剛太・越中康治・朴信永・若林紀乃・鍛冶礼子・八島美菜子・山崎晃（2015）保育者は障害児保育の経験をどのように意味づけているのか.保育学研究,53,1（印刷中）【査読有】
② 真鍋健（2013）保育者と外部支援者との協働による個別の指導計画作成に関する研究－Linked System における「アセスメント」から「目標設定」に焦点を当てて－.保育学研究,51,3,69-81.【査読有】
③ 松井剛太（2013）保育本来の遊びが障害のある子どもにもたらす意義－「障害特性論に基づく遊び」の批判的検討から－.保育学研究,51,3,9-20.【査読有】
④ 守巧・松井剛太（2013）保育現場における気になる子どもの保護者支援－気になる子どもと似た特性のある保護者の実態把握－.香川大学教育実践総合研究,27,35-44.【査読無】

〔学会発表〕（計４件）

① 松井剛太（2014）学会企画シンポジウム「保育臨床コーディネーター・ワークショップ」の再検討－保育実践の課題から，ワークショップ研修の在り方を探る－（話題提供）.日本乳幼児教育学会第 24 回大会.【広島大学（広島県・東広島市）
② 松井剛太（2014）自主シンポジウム　学びにくさ・暮らしにくさのある子どもたちが生きやすくなるために（1）－今を大切にすることがその先にもたらすもの－（指定討論）.日本特殊教育学会第 52 回大会.【高知大学（高知県・高知市）
③ 松井剛太・真鍋健・岡花祈一郎（2013）自主シンポジウム　活動に根ざした早期介入アプローチの保育における実践－日常の保育活動を活かした障害幼児の指導－（企画・司会・話題提供）.日本保育学会第 66 回大会.【中村学園大学・中村学園大学短期大学部（福岡県・福岡市）
④ 守巧・松井剛太（2013）保育現場における気になる子どもと似た特性を持つ保護者支援.日本保育学会第 66 回大会.【中村学園大学・中村学園大学短期大学部（福岡県・福岡市）

〔図書〕（計１件）

① 七木田敦・松井剛太（編著）　つながる・つなげる障害児保育－かかわりあうクラスづくりのために－.保育出版社,2015.（印刷中）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：

権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
松井　剛太（MATSUI, Gota）
香川大学・教育学部・准教授
研究者番号：50432703

(2)研究分担者
真鍋　健　（MANABE, Ken）
千葉大学・教育学部・助教
研究者番号：10611197

(3)研究分担者
岡花　祈一郎（OKAHANA, Kiichiro）
福岡女学院大学・人間関係学部・講師
研究者番号：50512555

(4)研究分担者
佐藤　智恵（SATO, Chie）
神戸親和女子大学・発達教育学部・講師
研究者番号：90552232